

# バスケットボールにおける状況判断力向上のための 指導法に関する発生運動学的考察 — アウトナンバープレーに着目して —

中瀬 雄三<sup>1)</sup>

## 1. 研究目的

ボールゲームにおいて、敵や味方を目で確認しなくても正確にパスやシュートを放つような、驚くべき状況判断力を備えた選手が実在する。そのような一流選手や、その選手を育てたコーチの貴重な身体知は存在していても、独自の指導方法は未解明のままであり、「原意識の深層に沈んだままである」と金子は述べている(2009)。

先行研究においては、鬼澤ら(2007)は状況判断力向上を目的に、バスケットボールのアウトナンバーゲームを採り入れた調査を行ったが、「介入内容や授業者が行った相互作用行動などが児童の状況判断力の変容にどのような影響を与えたかということについては、十分に確認することができなかった」と鬼澤らは述べている(2007)。このような指摘からもわかるように、選手の状況判断力を向上させるための研究として、指導者が選手のどのようなプレーに欠点を見出し、どういった考えや理論で指導を行ったのかという指導過程を明確に記述することが不可欠であり、記述内容から選手の状況判断力にどのような影響を与えたのかを厳密に分析し、考察することが重要だと思われる。

そこで、本論では、練習時における選手の動きから動感分析を行い、状況判断力向上のための練習法を考案・実施する指導過程を発生運動学的視点から考察することで、選手の状況判断力向上のための基礎的資料を得ることを目的とした。

## 2. 調査方法

北海道教育大学岩見沢校の女子バスケットボール部に所属する11名の部員に対し、プレー時における状況判断についての指示は一切せずにアウトナンバー・プレー(2対1)を実施した。その際のプレーをビデオ

カメラによって撮影を行った。撮影されたビデオ映像をもとに、プレーの改善点を見出すための動感分析とインタビュー調査を行い、オフェンス時におけるプレーの意図を聞き出した。それらをもとに、練習法を考案し、意識すべきポイントを指導しながら選手に実施させた。数日間の練習の後、再度アウトナンバー・プレーを行い状況判断力の変容を動感分析によって確認した。

## 3. 結果と考察

状況判断力の向上を目的とした練習法を創案し選手に実施するなかで、指導時において留意されるべき事柄が調査によって明らかとなった。今回は字数制限上、一名のみの考察に限ることとした。

### 選手Cによる偶発的プレー(まぐれプレー)の動感分析

ここでいう偶発的プレーとは、ある状況において状況の意味を読み解けないまま選択判断した動きかたが、結果的に成功してしまったプレーである。そのようなプレーを【成功したプレー場面】と【安易な予測のもとに動きかたを選択判断する場面】の二つの場面によって事例的に説明する。

#### 【事例1-成功したプレー場面】

選手Cがドリブル移動し、ディフェンスがドリブルの進路を妨害しようと選手Cに詰め寄る状況である。このとき、選手Cはレシーバーがいる方とは逆の手でドリブルをしていた(図では右手)。ディフェンスは素早く移動したため、選手Cとの距離はかなり詰まった状態であったにも拘わらず、選手Cはドリブル移動を減速させないまま、ディフェンスにパスを出す意図が読まれないようにゴール方向を見ながら素早くレシーバーに右手からパスを出した(以下、ノールックパス)(図1)。

1) 筑波大学大学院

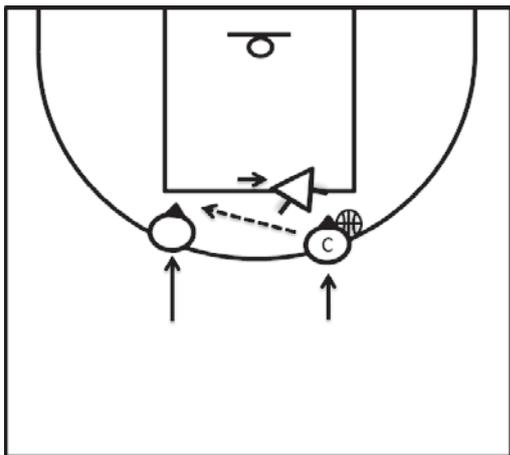


図1

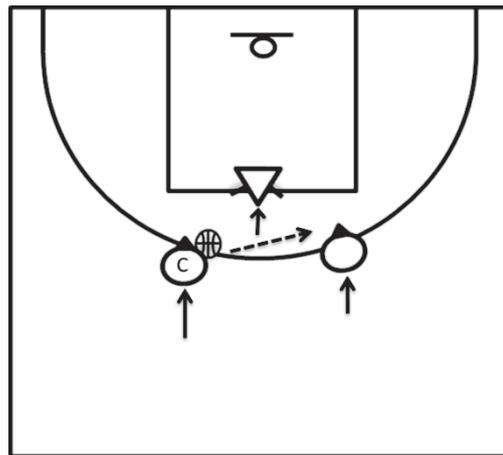


図2

選手Cは、ディフェンスから素早く詰め寄られ、間合いが詰まった状態であっても、レシーバーに的確にパスを出すことができる技術を持ち合わせていた。また、ディフェンスの隙をつき素早くパスを出し、レシーバーにシュートを打たせる場面が練習実施中に何度か見られた。一見、情況意味を読み解けた上での行動と捉えられたが、事例1とは僅かに異なる状況において、選手Cはミスをしてしまう。そのような状況を事例的に説明する。

#### 【事例2－安易な予測のもとに動きかたを選択判断する場面】

ボール保持者の選手Cがドリブル移動をし、レシーバーが選手Cよりもやや前を走っている。このときディフェンスは、選手Cの進路を妨害しようと寄ってしまえば、レシーバーにパスを出され、レイアップシュートを打たれてしまうことを警戒していた。そのため、パスが出されることを予測し、ボール保持者とレシーバーの中間位置を保つように移動していた。このようにディフェンスにパスを予測されているにも拘わらず、選手Cはレシーバーにパスを出してしまった(図2)。

このときのレシーバーの身体的特徴としてディフェンスに比べて小柄であり、また、パスやドリブルといった基礎技術も拙劣であり、詰め寄せられた状態ではレイアップシュートを打つことも難しい選手であったため、結果的にレシーバーはディフェンスに詰め寄せられボールをカットされてしまった。

#### ①選手Cのプレーに対する分析

事例2において、ミスとなった原因は大きく分けて二つある。一つは、選手Cがディフェンスのパスに反応しようとする意図を読み解けなかったことである。ディフェンスはパスを予測していたため、パスを出されたあと素早くレシーバーに詰め寄ることができた。

もう一つは、レシーバーの動感を把握しないままパスを出したという点である。レシーバーの基礎技術が拙劣であることや、ディフェンスに比べて小柄であるといった身体的特徴をもととした動感を把握していれば、パスを出すべきではないという判断に至っていたはずである。つまり、選手Cはレシーバーの動感を把握せずにパスを出したため、パスを出した後に、レシーバーがディフェンスに詰め寄せられ、結果的にボールをカットされることが予測できていなかったといえる。

選手Cはディフェンスが詰め寄ってきた場合においては、レシーバーに素早くパスを出しレイアップシュートを打たせることができていた。しかし、事例2において、ディフェンスがパスに反応しようとしているという点で、情況の意味が変化しているにも拘わらず、全く同じ動きかたを選択判断し、ミスとなってしまうことがわかる。つまり、選手Cは情況の意味を掴み、それに合わせて動きかたを選択判断しているのではなく、「自分がゴール方向へ動けば、きっとディフェンスは自分の進路を妨害してくるだろう」といった安易な予測のもとに行動しているといえる。このような、確実性の低い偶発的プレーを改善するために練習法の考案と実施を行った。

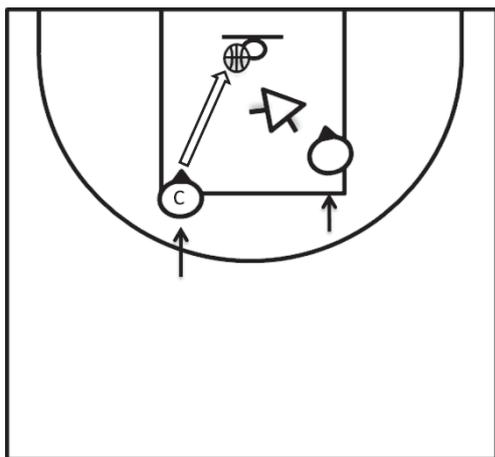


図 3

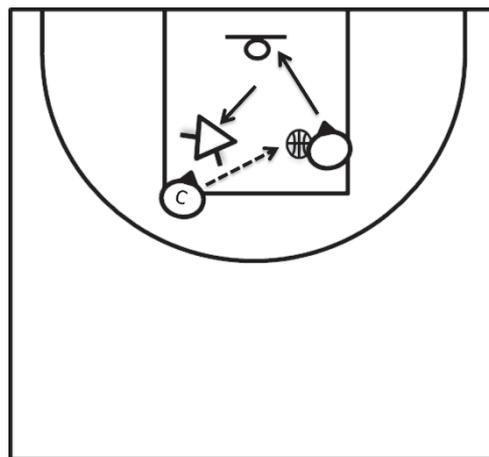


図 4

### ②選手Cのプレー改善点の考察

事例2で示したような、選手Cのドリブル移動中、ディフェンスがレシーバーへのパスを警戒しながら、ゴール近くに位置している場面を考えてみる。この状況における選手Cの判断としては、選手Cの特徴（他選手に比べ走るスピードが速いわけではなく、身長も高くない）を考慮すると、ディフェンスの妨害行為を躲しながらレイアップシュートを決めることは難しいと考えた。そのため、ドリブル移動中に、ディフェンスにシュート行為を妨害されないであろう間合いでストップし、ジャンプシュートを打つことが適切であると考えた（図3）。

しかし、選手Cがディフェンスとの間合いを察知し、ジャンプシュートを打とうとした場合でも、ディフェンスによってシュートブロックを狙う場合もある。このような状況においては、選手Cは、ディフェンスによるシュートブロックの意図を読み解き、シュートフェイクをすることによってディフェンスのシュートブロックを誘い出すことが重要と考えられる。何故なら、ボール保持者はディフェンスがシュートフェイクに反応している間にレシーバーにパスを出すことができるからである。結果として、レシーバーは周囲にディフェンスがいない状態でシュートを打つことができる（図4）。

### ③練習法の考案と実施

上記の選手Cのプレー改善点から、目指される動きかたを習得するための練習法を考案した。一つは、「ドリブル移動後のジャンプシュート」である。その練習は、選手Cが、ハーフラインからゴール方向へド

リブル移動をし、フリースローライン辺りでストップしジャンプシュートを放つ、といった手順で行った。

二つ目は、「ドリブル移動後にシュートフェイクからアシストパス」である。練習手順としては、ハーフラインから2人1組でゴール方向へ同時に走り出した後（選手Cはドリブル移動）、選手Cはフリースローライン辺りでシュートフェイクをした後に素早くレシーバーへパスを出し、シュートを打たせる。このような手順で練習を行った。なお、練習内容についての図は字数制限上、割愛した。

三つ目に、「状況意味把握トレーニング」である。状況意味把握トレーニングとは、選手Cが読み解けなかった状況の意味を抽出し、その状況の意味を設定した場において選手Cに状況を判断させるといった内容である。その状況とは、事例2のように、ディフェンスがパスを警戒しながらゴール近くに位置している状況である。ディフェンスには、「ボール保持者に寄るとパスを出されるので、レシーバーにパスを出されることを警戒しながら、ゴール近くに位置せよ」と指示をした。また、「ボール保持者がシュートを打つと感じたら、シュートブロックせよ」ということも伝えた。

練習中、選手Cが、ディフェンスのシュートブロックの意図があることを読み解けずにシュートを打つ、あるいはシュートブロックの意図がないのに拘わらずシュートフェイクをするなど、状況の意味を掴めていない場合には、ディフェンスや味方の動感や意図、位置関係をもとに、どのように動くべきであったかを指導した。状況の意味別の指導内容を事例的に説明する。

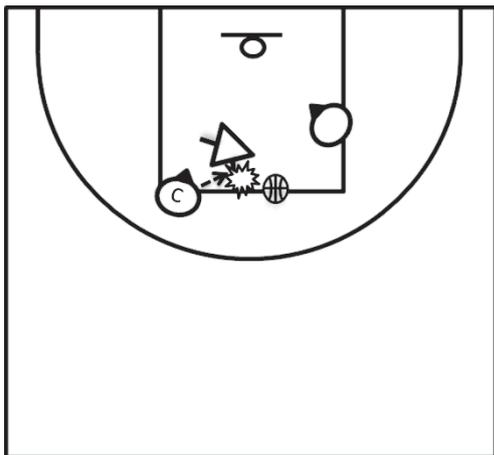


図5

### 【事例3—シュートフェイク後にパスをするが、パスカットされてしまう場面】

ディフェンスがパスを警戒しながら、ゴール近くに位置しており、選手Cのシュートをブロックしようと狙っている状況である。このとき、選手Cがディフェンスのシュートブロックの意図を読み解き、シュートフェイクをする。ディフェンスはシュートフェイクに反応するが、レシーバーとのパスコースの間にディフェンスが位置しているため、パスを出した結果、ディフェンスにパスカットされてしまう(図5)。

このような場面において、選手Cはドリブル移動をしながら、ディフェンスのシュートブロックの意図を把握するとともに、シュートフェイクの後にパスをするとき、ディフェンスがパスコースに位置するかどうかを予測できなければならない。

そのためには、ディフェンスやレシーバーのプレー中における意図を把握することによって、今後どのように動くかを予測することが必要となる。選手C自身と、ディフェンス、レシーバーの位置関係を把握することで、パスコースを確保でき、シュートフェイクのあとにパスを出すことが可能となる。

### ④再度2対1の実施による状況判断力の変容を捉えた考察

数日間の練習後、再度2対1を行い、ビデオ映像から状況判断力の変容を捉えるため動感分析を行った。選手Cは、ドリブル移動中ディフェンスがパスを警戒し、ゴール近くに位置している場面において(トレー

ニング前はパスを出しカットされていたが)、ディフェンスにシュートブロックをされない間隔を見極め、ジャンプシュートを打つことで得点した。また、ディフェンスにシュートブロックの意図がある場合には、シュートフェイクの後にレシーバーにパスを出し、シュートを打たすことができていた。これらの選手Cの動きの観察から、状況の意味の差異を以前よりも捉えられるようになり、状況の意味に合わせた動きを選択判断できるようになったと考えられる。

多くの選手のなかには、以前の選手Cのように、状況の意味を理解できないまま動いたときに、たまたま相手や味方が期待通りに動き、結果としてシュートが入った場合、「こう動けば良いのだ」と安易に理解し、そのプレーが習慣化してしまうことは少なくない。指導者はそのような選手の確実性の低いプレーを改善するために、「まぐれ」と見極める動感分析能力が求められる。金子(2007)は、まぐれという動感現象は単なる機械的な反復によって、その確率さえ上げればまぐれが消えるという考え方をまず遮断しておかなければならないと指摘している。指導者がプレーの成功と失敗を単純な確率論的問題と捉えてしまえば、ミスの原因は一向に掴めず、選手はミスを繰り返してしまう。さらに、結果のみがプレーの良否判断基準となってしまう、成功時と失敗時の決定的な違いである状況の意味に選手は気づくはずもない。

また、金子(2007)は、「まぐれの地平構造は抜き差しならない個癖の定着化と解消化というアポリアを隠している」と述べているように、状況意味を読み解けていない状態でのプレーの成功が、選手のさらなる個癖の定着化の原因になりうるのではないかと考えられる。指導者が、結果的にプレーが成功した選手に対し、「状況の意味を読み解けていないから時にはミスとなるのだ」と指摘をしても、実際にプレーが成功しているという事実から、全ての選手が状況意味を読み解くことの重大さに気付くわけではない。

まぐれの改善のために指導者は、プレーの結果としての成功と失敗だけに着目するのではなく、選手が敵や味方の動感や意図を把握し、状況の意味を捉えた上で判断し実行に移せていたか、ということを見抜かなければならない。また、指導者だけでなく、選手自身もプレーにおける良否判断基準を「結果」から「的確な状況把握によるものか」と定めることが不可欠である。選手は、そのような動感志向性をもって実践の場に立ち、初めて状況意味の差異に気づくことができる。そのために指導者は、選手が成功と失敗を繰り返

す状況の意味を抽出した場を新たに設定し、選手に状況判断させることで、成功時と失敗時の状況の意味の差異を理解させることが重要であると考える。

#### 4. まとめ

状況判断力を向上させるために、選手が状況判断を誤った直接的な原因を指導者が動きの観察から探り出すことが重要である。それは、選手の能力は千差万別であるため、同じ状況であっても選手の選択判断は区々であり、ミスの原因も異なるからである。よって、状況判断力向上のために、指導者は選手がミスを

してしまった原因を把握するだけの高い動感分析能力を備えていることが重要であるといえる。

#### 文 献

- 金子明友 (2007) 身体知の構造—構造分析論講義—. 明和出版, p.325.
- 金子明友 (2009) スポーツ運動学—身体知の分析論—. 明和出版, p.230.
- 鬼澤陽子, 小松崎敏, 岡出美則, 高橋健夫, 齊藤勝史, 篠田淳志 (2007) 小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上. スポーツ教育学研究, 26 (2), pp.59-74.

